

運動やスポーツとの多様な関わり方 「する」「知る」「見る」「応援する」を理解する 特別支援学校における体育理論の授業

— 体験活動を通じて、自らの運動やスポーツ活動について考える学習 —

石川 徹哉¹

「新学習指導要領」では、特別支援学校高等部の知的障害教育部門における保健体育科の内容として、体育理論が新たに追加された。本研究では、高等部1年生に対し、体験活動を通じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について学ぶ授業を行った。その結果、生徒が運動やスポーツの新たな楽しみ方に気付き、理解することができた。そこで、その成果と課題を踏まえ、授業づくりのポイントを提案することとした。

はじめに

平成31年告示の「特別支援学校 高等部学習指導要領」（以下、「新学習指導要領」という）では、保健体育科の内容において、高等学校保健体育科の内容との連続性を踏まえて、新たに体育理論が加えられた。

体育理論について、「新学習指導要領」では、運動やスポーツの多様性、効果と学び方、安全な行い方及び文化としてのスポーツの意義といった内容が、二つの段階で示された。また、「新学習指導要領」の「指導計画の作成と内容の取扱い」において、「3学年間にわたって取り扱うこと」、「運動やスポーツを『すること』、『知ること』、『見ること』、『応援すること』などの多様な関わり方についても取り扱うようにすること」と示された。

このように、体育理論が新たに位置付けられたが、特別支援学校における授業実践がなく、今後の授業づくりに試行錯誤が続くと考えられる。そこで本研究では、仮説検証の成果と課題を踏まえた授業づくりのポイントを提案することで、特別支援学校高等部における体育理論の授業づくりに貢献できると考えた。

一方、「新学習指導要領」における保健体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、(中略)豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と示されている。

また、平成31年の『特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編(下)(高等部)』（以下、『新解説 知的(下)』という）において、『体育の見方・考え方』とは、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、『運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適正等に応じた[する・みる・

支える・知る]の多様な関わり方と関連付けること』（文部科学省 2019）と解説されている。

つまり、授業で「体育の見方・考え方」を働かせるには、運動やスポーツの価値や特性などの知識とともに、「する・知る・見る・応援する」の多様な関わり方などに関する知識が必要であると考えられる。そこで、運動やスポーツとの関わり方について、生徒の実態把握をしたところ、多くの生徒は「知る」「応援する」といった関わり方についての知識をもち合わせていないと考えられた。

これらのことから、本研究においては、入学年次の体育理論の授業で、運動やスポーツとの多様な関わり方「する」「知る」「見る」「応援する」について扱うこととした。その際、生徒が実感を伴って理解できるよう、「知る」「応援する」に関わる体験活動を重点的に取り入れ、体験活動後に自らの運動やスポーツ活動について考える活動を行うこととした。

以上のことから、生徒が体験活動を通じて、自らの運動やスポーツ活動について考える学習を行うことで、運動やスポーツとの多様な関わり方「する」「知る」「見る」「応援する」を理解できると考え、本主題を設定した。

研究の目的

体験活動を通じて、自らの運動やスポーツ活動について考えることによって、運動やスポーツとの多様な関わり方「する」「知る」「見る」「応援する」を理解する、特別支援学校知的障害教育部門1年生における体育理論の授業づくりのポイントを提案する。

研究の内容

1 神奈川県立秦野養護学校
研究分野(授業改善推進研究 保健体育)

1 特別支援学校高等部(知的障害教育部門)保健体育科の内容について

第1表は、平成21年の『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(高等部)』(以下、『現行解説総則等編』という)(文部科学省 2009)と「新学習指導要領」における保健体育科の内容について整理し、比較したものである。

第1表 保健体育科の内容の比較

『現行解説総則等編』	「新学習指導要領」
「いろいろな運動」 ○体づくり運動 ○いろいろなスポーツ ・陸上運動 ・水泳 ・球技 ・武道 ・器械運動など ○ダンス 「きまり」 「保健」	A 体づくり運動 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育理論 I 保健

第1表の通り、新たに加えられた内容(領域)が体育理論である。特別支援学校高等部(知的障害教育部門)の保健体育科の授業づくりの中で、今後特に体育理論の授業づくりが課題となると考えられる。

2 体育理論について

「新学習指導要領」では、体育理論の内容として、「運動やスポーツの多様性」、「運動やスポーツの効果と学び方」、「運動やスポーツの安全な行い方」、「文化としてのスポーツの意義」が二つの段階で示されている。

本研究の対象生徒は、初めて体育理論を学ぶ生徒であることから、まず、「運動やスポーツの多様性」について指導することがよいと考えた。また、その中でも、「新学習指導要領」の内容の取扱いに示されている「すること」「知ること」「見ること」「応援すること」などの多様な関わり方を中心に授業を行った。

なお、検証授業では、「運動やスポーツとの多様な関わり方」という表現について、知的障害のある生徒が理解しやすいよう、「運動やスポーツの四つの楽しみ方」と置き換えて使用した。

3 体験活動について

平成28年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、「(前略)学んだことの意義を実感できるような学習活動も極めて重要であり、体験活動を通じて、様々な物事を実感を伴って理解したり、人間性を豊かにしたりしていくことも求められる。」(中央教育審議会 2016)と指摘している。

そこで、一般的には座学で知識を学ぶことがイメージされやすい体育理論ではあるが、本研究における体育理論の授業では、体育館において、体験活動を通じて実感を伴って理解できるようにした。さらに、広い

体育館での授業は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策という面でも有効であると考えた。

4 研究の仮説

特別支援学校知的障害教育部門高等部1年生の体育理論の授業において、生徒が体験活動を通じて、自らの運動やスポーツ活動について考える学習によって、運動やスポーツとの多様な関わり方「する」「知る」「見る」「応援する」を理解することができるであろう。

5 検証授業

(1) 検証授業について

期間	令和2年9月28日(月)～10月12日(月)
場所	神奈川県立秦野養護学校 落合校舎 体育館
授業者	メインティーチャー (以下、MTという)筆者 サブティーチャー (以下、STという)8名
対象者	神奈川県立秦野養護学校 知的障害教育部門高等部第1学年 1～3組(計25名) 【対象者の実態】 地域の中学校からの入学者23名は、言葉でのやりとりをすることができる。また、自分の考えを記述にて表現することができる。中学部からの進学者2名は、文字を書くことや自分のことを伝えることは難しい。
授業時数	全3時間
単元名	「運動やスポーツと自分～運動やスポーツの楽しみ方を見つけよう～」

(2) 単元の概要

各時間のテーマと主な学習内容は、第2表のとおりである。

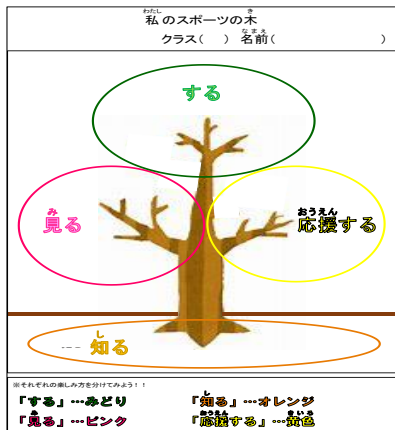
第2表 各時間のテーマと主な学習内容

時間	テーマ	主な学習内容
1	運動やスポーツの四つの楽しみ方について知ろう!	・運動やスポーツの楽しみ方を考える。 ・運動やスポーツの四つの楽しみ方を画像や動画から学ぶ。 ・考えた運動やスポーツの楽しみ方を四つに分類する。
2	運動やスポーツの「知る」「応援する」楽しさを実感しよう!	・「知る」「応援する」楽しさを体験活動を通じて学ぶ。
3	自分に合った運動やスポーツの楽しみ方を考えよう!	・2時間目の学習を振り返る。 ・先生の運動やスポーツの楽しみ方を知る。 ・自らの運動やスポーツの楽しみ方を考える。

(3) 学習指導の工夫

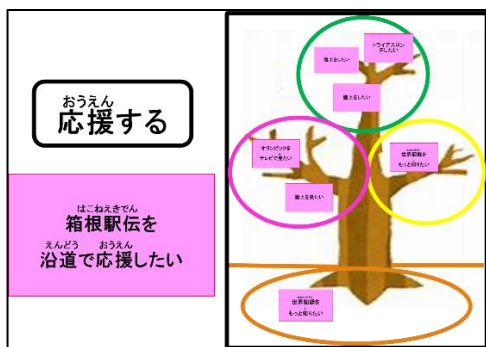
ア 学習プリント「スポーツの木」の活用

第1図は、運動やスポーツの四つの楽しみ方についての理解を促すために作成した学習プリント「スポーツの木」である。実際には、次のように生徒が取り組んだ。



第1図 学習プリント「スポーツの木」

1時間目は、まず付箋に運動やスポーツをどのような方法で楽しみたいかを書く活動を行った。その後「知る」「知る」「見る」「応援する」の四つの楽しみ方を学習し、授業のはじめに書いた付箋を「スポーツの木」に貼り付けながら、四つに分類する活動(第2図)を行った。



第2図 付箋の分類

3時間目には、第一学年の教員を中心に、事前に作成を依頼した「先生の『スポーツの木』」を見て回った。その後、この単元の学習を通して、新たに思ったり、考えたりした運動やスポーツの楽しみ方を、1時間目とは違う色の付箋に書いて、貼る活動を行った。

以上の活動から、1時間目のスポーツの木が成長し、3時間目には、より多くの付箋が貼られることを目指した。

イ 視聴覚教材の活用

生徒によって、スポーツに関する既有知識が大きく異なるため、各スポーツのイメージや特性を共有できるよう、画像や動画といった視聴覚教材を活用した(第3表)。

具体的には、オリンピックやパラリンピック等の国際大会における名場面、大会役員や審判、選手を指導

しているコーチや監督などの画像や動画を体育館のスクリーン(壁)に映しながら、運動やスポーツの四つの楽しみ方やスポーツのもつ価値を伝えた。

第3表 活用した主な画像と動画

1時間目
○バドミントン 試合中の選手と審判と観客の様子 ○視覚障害者のマラソン 選手と伴走者が走っている様子 ○体操 コーチと選手が会話している様子 ○サッカーワールドカップ 観客が応援をしている様子 △リオデジャネイロオリンピックの女子バドミントンダブルスの決勝(日本優勝) △リオデジャネイロパラリンピックの女子ゴールボールの予選(一進一退の攻防の末、日本引き分け) △東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を応援する飲料メーカーのCM
2時間目
△大学応援団とチアリーダーによる応援 ◇陸上競技男子走り高跳び (ハビエル・トマヨル選手、1993年 世界記録樹立) ◇陸上競技男子棒高跳び (アルマント・デュブランティス選手、2020年 世界記録樹立) ◇陸上競技男子100m走 (ウサイン・ボルト選手、2009年 世界記録樹立)

(○は画像、△は動画、◇は画像と動画)

ウ 「知る」「応援する」楽しさを実感する体験活動

2時間目には「知る」「応援する」楽しさを実感しながら理解するための体験活動を設定した。具体的な活動は次のとおりである。

(7) 走り高跳びと棒高跳びの世界記録を知る

この活動のねらいは、男子走り高跳びと男子棒高跳びの世界記録の高さを実感させることである。はじめに二つの競技を画像や動画により説明した後、ヘリウムガスを入れた風船をそれぞれの世界記録の高さまで上げて見せた(第3図)。



第3図 世界記録の高さの風船を見ている様子

(イ) 100m走の世界記録樹立時の歩幅を知る

この活動のねらいは、男子100m走の世界記録樹立時の歩幅の広さを実感させることである。まず、世界記録誕生の瞬間の動画を見せ、速く走るためには、速い脚の回転と広い歩幅が必要であることを説明した。その後、床に足形を貼って示した(第4図の○)ウサイン・ボルト選手のスタートから7歩目までの距離を何歩で走れるか確認させ、世界記録樹立時の歩幅の広さを実感させた(第4図)。



第4図 世界記録の歩幅を確認している様子

(ウ) ホームラン競争のバッターを集団で応援する

この活動のねらいは、集団での応援を体験し、応援の楽しさを実感させることである。まず、大学野球の応援団とチアリーダーが応援歌に合わせて応援する動画を視聴させ、集団での応援のイメージをもたせた。その後、野球経験のあるST1名が、ホームラン競争で新記録をねらうバッター役となり、応援団長(MT)のリードにより、10球挑戦する間、ペットボトルやボンボン、太鼓を活用しながらSTを応援することとした(新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、発声するのは応援団長のみとした)。また、ホームラン競争終了後に、バッター役へのインタビューを行い、STは応援の効果等を語るとともに、応援への感謝の意を表し、生徒に伝えた。

6 検証授業の結果と考察

次の(1)～(3)の視点で検証を行った。

なお、検証の対象となる生徒は、欠席者やその質問への記入により変わるため、図表には、その都度n数(対象の生徒数)を記載した。

(1) 生徒が授業をどのように捉えたか

生徒が各授業をどのように捉えたかを検証するため、形成的授業評価票(高橋他 2003 p.14)から、筆者が体育理論の授業でも活用可能と考えた4項目(第4表)により、毎時間授業終了後に、生徒に評価を求めた。各項目の回答は「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点とし、各項目の時間ごとの平均点を算出した(第4表)。また、()内は、形成的授業評価の診断基準(高橋他 2003 pp.12-15)による5段階評定を表している。

第4表 形成的授業評価の結果

項目	授業時間	1時間目 (n=17)	2時間目 (n=18)	3時間目 (n=16)
1 感動の体験 「深く心に残ることや、感動することがありましたか。」		2.44(4)	2.44(4)	2.38(4)
2 新しい発見 「『あっ、わかった!』とか『あっ、そうか!』と思うことがありましたか。」		2.53(3)	2.61(4)	2.75(4)
3 楽しさの体験 「今日の授業は楽しかったですか。」		2.65(3)	2.89(4)	2.75(3)
4 自主的学習 「自分から進んで学習することができましたか。」		2.35(3)	2.83(5)	2.63(4)

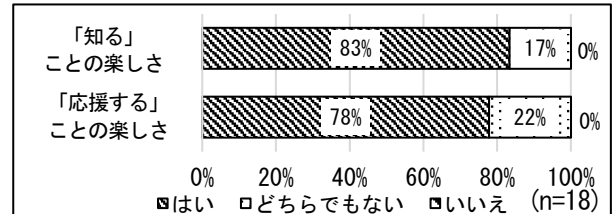
第4表を見ると、「感動の体験」は、3時間目に平均点が低下しているが、これは、1・2時間目には機会があったスポーツの感動場面の動画の視聴が、3時間

目にはなかったことの影響と考えられる。「新しい発見」は、単元が進むにつれて平均点が上昇した。これは、2時間目の体験活動や3時間目の「先生の『スポーツの木』」により、新しい発見が生まれた可能性が考えられる。「楽しさの体験」は、2時間目が2.89点で最高点であり、本研究において重点的に取り入れた体験活動が生徒に評価されたと考えられる。「自主的学習」も、体験活動を行った2時間目が2.83点と最も高く、評定は「5」を記録した。また、全体的に見ると、2・3時間目の評定が概ね4であり、多くの生徒は、授業を肯定的に捉えていたと考えられる。

(2) 体験活動を通じて、自らの運動やスポーツ活動について考えることができたか

ア 体験活動を通じて「知る」楽しさと「応援する」楽しさが伝わったか

2時間目に行った体験活動を通じて、「知る」楽しさと「応援する」楽しさが伝わったか、分析を行った。



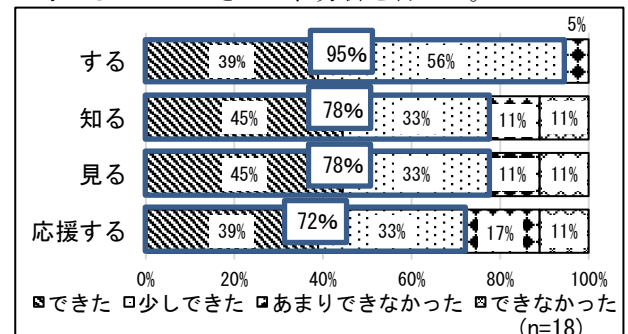
第5図 「知る」「応援する」楽しさがわかったか

第5図は、2時間目の振り返りプリントの質問「『知る』『応援する』ことの楽しさは、わかりましたか」に対する回答割合を表した図である。「知る」「応援する」ことの楽しさがわかったかという質問に対して、「はい」と回答した生徒は、「知る」が83%、「応援する」が78%であり、いずれも残りの生徒は、「どちらでもない」と回答し、「いいえ」と回答した生徒は、いなかった。

また、2時間目の振り返りプリントには、「テレビで見るとより高さが上がった」「世界記録のすごさを実感できました」「知る楽しさがわかりました」といった「知る」楽しさについての感想や、「応援楽しかった」「応援が大切なことがわかりました」「やるのもよいけど、応援するのもありだと思った。」といった「応援する」楽しさについての感想があった。

イ 自らの運動やスポーツ活動について考えることができたか

自らの運動やスポーツ活動の四つの楽しみ方について考えることができたか、分析を行った。



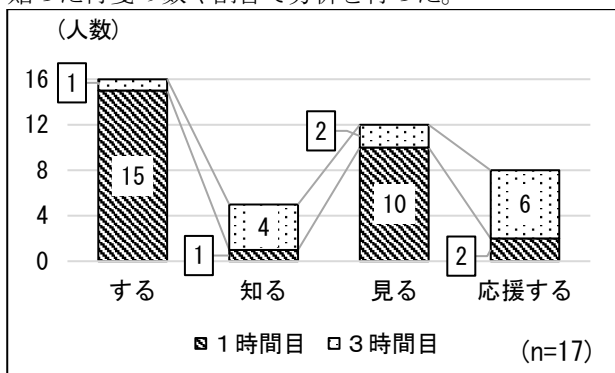
第6図 四つの楽しみ方を考えることができたか

第6図は、事後アンケートで行った「四つの楽しみ方について考えることができたか」という質問に対する回答割合を表した図である。「できた」と「少しできた」を合わせた群は、「する」で95%、「知る」「見る」で各78%、「応援する」で72%となった。どの楽しみ方も70%以上となり、多くの生徒は、自らの運動やスポーツ活動の四つの楽しみ方について考えることができたと考えられる。

以上のことから、体験活動を通じて、「知る」ことや「応援する」ことの楽しさが多くの生徒(約80%)に伝わり、四つの楽しみ方から自らの運動やスポーツ活動を考えることができたと考えられる。

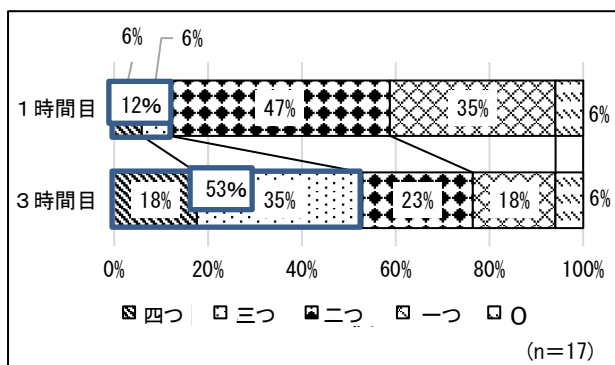
(3) 運動やスポーツとの多様な関わり方を理解することができたか

生徒が運動やスポーツとの多様な関わり方を理解できたかについて、生徒が記入して「スポーツの木」に貼った付箋の数や割合で分析を行った。



第7図 楽しみ方ごとの1時間目の記入者数と3時間目の増加した記入者数

第7図は、生徒が付箋に記入した四つの楽しみ方について、1時間目に記入できた人数と、1時間目には記入できていなかったが、3時間目に新たに記入することができた人数を表した図である。「知る」は4名、「応援する」は6名が、新たな楽しみ方として付箋に記入できたことがわかる。



第8図 記入できた楽しみ方の数ごとの人数の割合の変容

第8図は、四つの楽しみ方のうち、記入できた楽しみ方の数ごとの人数の割合の変容を表した図である。三つ以上の楽しみ方を記入できた生徒は、1時間目には12%であるが、3時間目には53%と増加が見られ、全体的に楽しみ方の幅が広がっていることが伺える。しかしながら、3時間を通して新たな楽しみ方を見つ

けることができなかった生徒も見られた。これらの生徒の中には、STによる個別の支援が必要な生徒が数人見られた。これは、授業後の協議の場で、教員から「情報共有の時間がもっとあった方がよかった」との意見があったことから、MTがSTに各学習活動の意図やねらいを十分に伝えられなかったことが原因の一つとして考えられる。

一方、検証授業では、「応援する」には二つの応援があることを説明した。一つは、選手やチームに声援を送る直接的な応援であり、もう一つは、審判をして大会を支えたり、選手のお弁当を作ったりする間接的な応援である。間接的な応援は重点的には扱わなかったが、生徒Aは、3時間目に「応援する」の楽しみ方として、「オリンピックの商品を買う」という間接的な応援についての記述をした。これは、「先生の『スポーツの木』」に「オリンピックスポンサー企業の商品を買うようにしている」と記述されていたことが影響していると考えられる。他にも、「先生の『スポーツの木』」の影響を受けたとみられる記述が多数あり、「先生の『スポーツの木』」を見て回る活動は、運動やスポーツの様々な楽しみ方を理解する上で有効であったと考えられる。

以上のことから、多くの生徒は、運動やスポーツの楽しみ方が広がり、運動やスポーツとの多様な関わり方を理解することができたと考えられる。

研究のまとめ

1 成果と課題

仮説検証の結果を基に、本研究の成果と課題を次のとおり整理した。

(1) 体育理論の授業に体験活動を取り入れることによる成果

多くの生徒は、体育館で行った3時間の体育理論の授業を肯定的に捉えた。中でも2時間目の体験活動を、生徒は高く評価した。

体験活動によって、一流選手のパフォーマンスや集団での応援の効果等、スポーツのもつ価値を、実感しながら理解することができた。

(2) 他者の運動やスポーツとの関わり方を知ることによる成果

生徒が自らの運動やスポーツの楽しみ方を広げるうえで、普段から関わりのある教員が作成した、「先生の『スポーツの木』」を見て回る活動が有効であった。

(3) 個々の状況に応じた支援の課題

本研究では、「スポーツの木」の成長が見られなかった(付箋が増えなかった)生徒もいた。それは、MTが学習活動の意図やねらい等をSTに十分に説明できなかったことが原因の一つであると考えられる。

2 体育理論の授業づくりについての提案

前述の研究の成果と課題を踏まえ、体験活動を取り入れた体育理論「運動やスポーツの多様性」の授業づくりのポイントを提案する。

(1) 座学のイメージを捨てる

体育理論は教室で座学を行うものといったイメージを捨て、活動に応じた場所を設定し、体験活動を取り入れる。

(2) 「知る」楽しさと「応援する」楽しさの重点的な指導

「知る」楽しさと「応援する」楽しさの理解促進に重きを置いた指導を行う。

(3) 教員や友だちのスポーツライフの教材化

生徒が日常的に関わることの多い教員のスポーツライフを教材として活用する。また、今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、友だちとの情報交換は行わなかったが、今後は、友だちのスポーツライフも教材として有効に活用できると考える。

(4) 体育理論の内容の共通理解と授業に関わる情報の共有

新たに領域として設定された体育理論の授業についての事例は少ない。「新学習指導要領」や『新解説知的(下)』の、内容を共通理解した上で、授業に関わる情報の共有及び検討が今後も必要である。

また、体験活動の設定にあたり、参考として、本研究で筆者が配慮・準備したことを第5表に示す。

第5表 体験活動についての整理

<p>「知る」楽しさを実感する体験活動</p> <p><u>「男子走り高跳びと男子棒高跳びの世界記録」</u> →○目で高さを感じられるよう、風船を上げて見せる</p> <p><u>「陸上競技男子 100m走世界記録樹立時の最初の7歩の歩幅」</u> →○体で歩幅の広さを感じられるよう、足形を床に貼る →○歩幅のもつ意味を事前に説明する 「速く走るためには、速い脚の回転(ピッチ)と広い歩幅(ストライド)が必要であること」</p> <p>「応援する」楽しさを実感する体験活動</p> <p><u>「ホームラン競争をしているバッターを集団で応援」</u> →○皆で合わせやすく、一体感を感じられるような応援歌を選定する →○応援のための用具を調達する ペットボトル、ポンポン、太鼓等 →○シナリオを作成する</p> <ul style="list-style-type: none">・STが空振りやホームランを打つタイミング・応援団長の振る舞い等・STへのインタビューの場面設定(STが応援の効果語を語るとともに、応援してくれた人にお礼を言う) <p>※教材には、生徒が目や耳、体で感じられるようなものを設定した。</p> <p>※体験活動の前には、既有知識の差を埋めるために、画像や動画を活用し、丁寧な説明を行った。</p>
--

3 今後の展望

本研究では、高等部1年生を対象として「運動やスポーツの多様性」についての授業を、体験活動を通じて行うことで、「する」「知る」「見る」「応援する」の理解が促進され、一定の成果が見られた。

このことから、1年次に運動やスポーツとの多様な関わり方を理解することで、「体育の見方・考え方」を働かせることにつながると考えられる。今回生徒が学んだ四つの楽しみ方を2年次、3年次の体育でいかせるような授業を目指していきたい。

また、今後は、「運動やスポーツの効果と学び方」、「運動やスポーツの安全な行い方」、「文化としてのスポーツの意義」についての授業づくりについても研究していきたい。

おわりに

体育理論の授業は、運動やスポーツの得意・不得意や障害特性による困難さに関わらず、楽しく学べる単元であると考えられる。また、今回、運動やスポーツとの多様な関わり方について学習したことは、運動やスポーツをすることが好きではない生徒にとっても、今後の運動やスポーツの楽しみ方の幅を広げる機会となったと考えられる。体育理論の授業により、運動やスポーツがより好きになってもらえたらと願う。

生徒たちからは、「楽しかった」、「四つの楽しみ方を自分の目、体で感じられてよかったです。」などの感想があった。また、教員からは、生徒が検証授業で学んだことを思い出して活動していることや教員の意識が変わったなどの意見があった。同じ生徒に同じ授業は二度とできない。だからこそ、一緒に取り組む教員の力を借りながら、試行錯誤し、より生徒にわかりやすく、楽しく、今後の役に立つ授業をつくれるよう、努めていきたい。

最後に、本研究を進めるにあたり、御協力いただいた秦野養護学校の職員をはじめとする全ての皆様から感謝申し上げる。

引用文献

- 中央教育審議会答申 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 p. 53
- 文部科学省 2009 「特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(高等部)」 pp. 455-459
- 文部科学省 2019 「特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編(下)(高等部)」 pp. 57-58
- 高橋健夫、長谷川悦示、浦井孝夫 2003 「体育授業を形成的に評価する」(高橋健夫編 『体育授業を観察評価する』 明和出版)